

八わりましの名をあげて——惟中という陰画——

篠原進

ほと、ぎす八わりましの名をあげて 梅翁

をどう受け止めたのか。この問題から考えていこう。

—

延宝八（一六八〇）年五月七日、西鶴は大坂生玉神社別当南坊で二度目の矢数俳諧を興行し、四〇〇〇句の独吟を成功させる。それに際し宗因は右の句を贈った。当時三九歳の西鶴は、「今度西山宗因先師より日本第一前代之俳諧の性と世上に申わたし候。さて／＼めいばく此度也」（下里知足宛書簡^①）と子どものように悦び昂揚を隠せない様子であるが、宗因はこの句にどんなメッセージを託したのだろうか。前回の興行延宝五年五月二五日では、「かゝる大なる事にはと辞退^②」（『仙台大矢数』巻之下）した彼が、今回はなぜそうしなかったのか。ちなみに延宝八年当時宗因は七六歳（惟中は四二歳）。連歌の席はもとより俳席も数多く持たれたためか多忙を極め、前年などは「出座連続の疲労」のため「連歌・俳諧とも一句も口を出ない状態^③」で、九月一日には瘡を発症してもいた。そんな彼は西鶴のパフォーマンス

既に明らかなごとく、右の句は藤原頼長と源頼政の間で交わされた「ほと、ぎす名をも雲井にあぐるかな／弓はり月のゐるにまかせて」（『平家物語』巻四^④「鶯」・謡曲「鶯」）を踏まえたもので、矢数俳諧の記録達成という時宜に叶う絶妙の句であることは間違いない。それを容認した上で、前田金五郎は「郭公が五月雨の雲のたれこめた大空に盛んに鳴いて、名声を天下に揚げる」とどの意に、西鶴が此の四千句興行で、従前に増して大いに天下に其の名を振るうことだの意を含ませる」と句意をとる。

五月ゆえに郭公が詠み込まれた。だが、それだけではない。「軽口にまかせてなけよほととぎす」を発句とした百韻で宗因の批評を仰ぎ（『大坂独吟集』）、亡妻を追善する『独吟一日千句』（延宝三年四月八日序）の際は「脉のあかる手を合してよ無常鳥」と

詠んだ西鶴に、宗因は「郭公爰こそなかは就中」という句を贈っていた。多少誇張して言えば郭公は西鶴の換喩でもあったのだ。前掲の西鶴書簡を紹介した大谷篤蔵は「宗因の「八わりまし」の句に西鶴に對する皮肉をよみとる解釋が、はつきりと西鶴自身によつて否定されることになる」とするが、野間光辰はこう書いている。

たとへそれが型の如き儀礼的な挨拶に過ぎないものであり、そして宗因の真意はむしろその反対に傾いてゐたとしても、とにかく宗因がうはべだけでも、西鶴の四千句独吟を「日本第一」の記録と認定し、彼の創始した矢数俳諧を前代未聞の「俳諧の性」であるとまでいつて、世間に推薦してゐるといふことは看過することが出来ない事実である。

従来「郭公八わりましの名を上げて」といふ宗因の第三を皮肉の意味に解し、師弟の疎隔離反をそこから読みとらうとする説が行はれてゐたが、右の事実を考慮に容れるならば改めて考へ直さなければならぬであらう。(傍線引用者・以下特に断らない限り、傍点も含み同)

「真意は」その反対「うはべだけ」と皮肉を読む傍線の前半部と、それを否定する後半部とは明らかに矛盾し、論旨が不鮮明になっている。厳密な考証で鳴らした泰斗さえも混乱させた、宗因の句。彼は軽口の一形態である即吟を速吟化して矢数俳諧にひた走る愛弟子の姿をどう見詰めていたのか。そもそも「八わりまし」とはどういう意味なのか。

前田金五郎は「宗因は内心はともかく、表面は西鶴を賞讃しており、従つて上記の「八わりまし」は激称の意に取るべきである」と野間説を追認した上で、「八わりまし」程度の甚しいのと言う語。(中略)なお、同様な意に「五割まし」があるとする。宗因の真意に迫るため、もう少し用例を探ろう。

天満の宗因、深川の桃青、一生の中編集をせず、いひ出せる句はよしあしともに、門弟または連衆より板行して世にあり。これ集もの、本意なり。近代は点者国々にみちくれば、名もそれとしられたく、我がねらふ所の一体もまぎれぬやうに人におもはせ、又は五わり増のたよりともなさんと、点者の集を出すことはり也。(中略)点者の相談もなく、我まゝに板行させて、家来筋にいひつけ、書をうらせて板料のたすけとなす。これ有まじき事ぞかし。

(轍子「花見車」元禄一五年三月跋刊)

ここでの「五わり増」とは実力以上に見せるという意味で、否定的なニュアンスが強い。実際、宗因の句を「皮肉の意味に解し」ている研究者も依然として存在するのだ。

「矢数俳諧は」唯軽口の早業であつて決して俳諧の正道ではなかつた。寧ろ俳諧の墮落でもあつた。島居清はこう断定した上で、「宗因も、矢数俳諧に対しては大きな疑問を持ちつゝも、これを如何ともすることが出来ず、奔放に委したまふ、遂に晩年唯消極的に俳諧の口をつぐむより仕方がなかつたのではなからうか。(中略)宗因が俳諧に対して口を閉じたと伝説されるの

も実はこの年（引用者注・延宝八年）であつた^③と述べ、西鶴のパフォーマンスが宗因の思いと乖離していたことを指摘する。加藤定彦も同意見で、宋因は「そうした俳壇の傾向には素直に喜べないものを感じていた」として、彼がその年に詠んだ「いま筑波やかまくら宗鑑いぬざくら」（続無名抄）^④「なんにもはや楊梅の実むかし口」を傍証とする。それらの句に「俳風の乱脈を嘆く宗因の思いを読むことの是非はともかく、「俳歳旦は、不仕候。当風あわぬ事、無用に存候」（延宝九年正月十日付藤波修理宛宗因書簡）と彼が「当風」の俳諧と距離を置こうとしていたことは間違いない。ちなみに「連歌師の誰とやらんが宗因に逢て、俳諧にかたぶきてんがういはるゝとて異見しられしに、さればこそ、予もさはおもへども、俳諧をすれば世わたりのいとやすきに、と申されしとぞ」（綾巻^⑤後編^⑥評判）延宝八年四月刊）という発言も残っている。

もしそうなら、矢数俳諧のどこに問題があつたのだろうか。惟中は前年（延宝七年）刊の『近来俳諧風鉢抄』（中）にこんな話を記している。

「近年俳道の盛なるに任て、千句・万句など名付、早口の俳諧を好む事、誠に何の味ひもなき事也。句は沈思して、一句にても心をとめてしだいすこそ面白けれ。いつのころにか月日は忘れし、梅翁師のもとにて興行の会終日勤て、門弟各その日の懷紙うつして帰路に趣く。時は夜半の終りになん。道の程一町計も行過しに、老師追來りて、けふの

句の中、前の大徳寺と書れたり、とある一句、寺の一字をのけて、前の大徳と書れたり、とあらたむべし、とのたまひて帰らせ給ふとぞ。又、このほど余もつらなりし席にて、「やる玉章や遠近の山／雲の立恋路のすゑを混乱なく」と付給ふに、雲の、といふの、字ぬるし、立雲や、とあらたむべし、とて再吟し給ふ。誠にかゝる一字に、さまでの事もあらじと思へども、明匠の思ひいれ、さりとは有難き事也。かゝる事、もろこしにも多し。

「推す」、「敲く」の「一字」にこだわり抜いた唐の詩人賈島。そこから生まれた、「推敲」の故事。「もろこしにも多し」という一例であるが、そうした文脈に沿って提示された、宋因の逸話。彼は「前の大徳寺」を「前の大徳」に、「雲の立」を「立雲や」と「一字」にこだわり続け「沈思して」、「一句にても心をとめてしだい（作り出）」していたと記すのだ。

延宝五年五月二五日、西鶴は大坂生玉本覚寺で最初の矢数俳諧を試み、一六〇〇句の独吟を成功させていた。惟中はそれを念頭にこれを書いたとも言えるし、右の逸話を読む限りでは宗因も言い放しの速吟には懷疑的であつたと思える。それを根拠に、「八わりまし」の句には「皮肉」の意が込められていたと類推できないこともない。

だが、本当にそうか。なぜなら、それはあくまでも惟中というバイアスのかかった情報だからである。一四、五歳から二五、六年間俳諧を修業し「梅翁師の膝下をはなれず、上手といはれし

人にも立まじり」、「明匠達の申侍りし事を耳の底にとめた」といふ彼は一方で、宗因についてこう書いてもいるのだ。「貞徳老の門人貞室・維舟・季吟など、各笑中に刃をかくしたるまじはりにて、見ぐるしき聞えども多かりけるとなん。是、貞徳の質の及ぶ所也。今の梅翁老師は、連哥の高名かくれなく、俳諧の奇妙古今にまれなれ共、生得に慢心の思ひなければ、凡天下に偏執なき名人也。其徳自然と門人に及びたればこそ、度々の席ゆるやかに、各花をゆづり月を残して、うつくしき事也」(同書・上)と。

貞門の人たちが「笑中に刃をかくし」ていたか否かはともかく、「豁然大悟之人」(『俳諧太平記』延宝八年八月刊)と評され、何事にも鷹揚で無欲だったと語られる宗因。となれば、「狂句はいかになれて、そのうち一句も一巻もみづから撰び世にひろめ給ふこゝろもなし。たまさかの一句をも、板におこしてうりありくとて、とうどいやがらせ」(『しぶ団返答』延宝三年九月跋刊)、「何集と名付て一集の建立もなく、何の書とて一巻のものををも開板せず。多くの俳諧の発句も、みづから書とめても置せられず、只時にあたり、興によりて、つぶやき給ふ」(『破邪顯正返答』延宝八年二月刊)淡泊な宗因が、たとえ弟子に対してでも「皮肉」を浴びせるようには思えないのだ。かといって「激称の意」にも取れない。結論を先取りして言えば、宗因は一貫してニュートラルだったのではないだろうか。自らが巻き起こした談林俳諧ブームと、それへのパッシング。惟中の反論を契機に本格化

する論争。そんな動きに当惑しながらも傍観者に徹していた彼は、四〇〇〇句の独吟を成功させた西鶴の依頼も拒むことなく「八わりましの名をあげましたね」と挨拶の句を贈った。それは「激称」でも「皮肉」でもない、韻文の曖昧さを逆手にとった、いかにも宗因らしい大人の対応だったのではないかと思えるのである。

二

沈黙する宗因と、饒舌な惟中。ここで二人の関係を、改めて考えてみよう。尾崎千佳によれば、宗因は慶長一〇(一六〇五)年、熊本生。俗名西山次郎作、実名豊一。八歳で歌道を学び、一五歳で八代城主加藤正方の側近として仕えた。一八歳の時、里村昌琢に連歌を学び、淀屋言当(个庵)らの連歌興行に一座。二三歳で『源氏物語』書写に携わり、二五歳の時、昌琢から『伊勢物語』を、二八歳の時には寛佐から『源氏物語』を伝授される。二七歳で宗因を号すが、翌年六月加藤家改易となり、法体した正方に従う。二九歳の時には、京都堀川了覚院に隠棲した正方の近くに草庵を結び、『肥後道記』を献上。三八歳の時、嫡子宗春(幼名伊之助)誕生。四〇歳の九月、広島へ赴く正方を送る。四三歳の九月に摂津中島天満宮の連歌所宗匠に就任。翌年、正方没。

俳諧活動が目立つのは、五〇歳の承応三(一六五四)年からで、その年の一〇月、松江重頼の俳諧百韻に「一幽」号で一座。

五二歳で天満向榮庵新造記念の俳諧百韻興行。以後、連歌と並

行し俳諧活動にも本腰を入れる。ちなみに、俳諧独吟百韻を五三歳以前の春に完成。六〇歳の時、江戸、小倉、長崎と回る。六一歳、季吟らの俳諧百韻に一座。六三歳の時、西鶴の「軽口」に評点を施す。一〇月に妻没。六五歳で再び九州に赴き、小倉、伊万里、長崎、佐賀、福岡と有力者の許を回り、翌年小倉福聚寺で雄髪。惟中は「禪ぶすまつゐでおもしろき御法に哉」と詠む。その間、連歌所宗匠の地位を子息の宗春に譲る。六八歳、惟中独吟「文をこのむ」俳諧百韻に評点を施す。六九歳、鶴永の『生玉万句』に第三を寄せる。夏、「蚊柱は」独吟百韻成る。この年、各地の従容に応え堺、京都、松坂、伊勢山田と回る。七〇歳の時、『蚊柱百句』刊。三月下旬、『しぶうちわ』がそれを難じ、惟中が反論。延宝七年には「出座連続の疲労」のため「連歌・俳諧とも一句も口を出ない状態」となるが、それでも精力的な活動

を続け、天和二年三月二八日没。享年七八。

「席ゆるやかな」宗因は多くの支援者に歓迎され、遠隔地もいとわず小まめに足を運んでいる。注目すべきはその人脉で、大坂城代青山宗俊、平城主内藤義概（風虎）、明石藩主松平信之、姫路藩主榊原忠次・政房父子、出羽上山藩主土岐頼行、加賀前田家家老本多政長、伊勢荒木田氏富、小倉藩主小笠原忠雄、福岡藩主黒田光之、佐賀藩主鍋島光茂、淀屋个庵、千宗室、三井秋風、笹屋半四郎、伊勢山田奉行八丁宗道などなど。資料が残る大坂城代青山宗俊との会食のみで、年間一回（寛文七年）、一回（同八年）。会合の総計はその何倍にもなるだろう。六〇代の後半から七八歳で亡くなるまで京坂はもとより、奥州の平、江戸、伊勢山田、姫路、山口、九州と支援者の許を精力的に訪れた行動力と体力は驚嘆に値する。宗因、西鶴、惟中の動向を別表に掲げる。

延宝二年 (一六七四)	西鶴 (33歳)	宗因 (70歳) 「しぶうちわ」の「返答心につらね給」ふが「宗因は」おとなげなしとにや、かいやりおかれ侍し」(宗因「阿蘭陀九二番船」延宝八年)。	惟中 (36歳)	延宝二年正月頃、『蚊柱百句』刊。これを三月下旬、南都去法師撰「しぶうちわ」が批判。
同三年	四月三日、妻没。 八日、『独吟一日千句』。 四月、『大坂独吟集』刊。 是歳、法休。	四月一日、惟中、任口と三吟。 四月三日頃、西鶴妻への追善句を送る。 四月下旬、江戸内藤風邸での俳諧百韻に一座。 五月頃、松意ら江戸談林連衆に「されば爰に談林」の句を送る。 六月下旬、堀坂。	四月、京坂に上り宗因、任口と会う。任口の跋を得て「俳諧蒙求」刊。 九月、『しぶ団返答』を著す。	一月、松意編「談林十百韻」刊。

同四年	正月、『大坂歳旦』刊。 一〇月二五日序、古今俳諧師手鑑』刊。 是歳、旨恕撰『草枕』刊。旨恕と両吟。	四月刊、惟中『梅翁判十百韻』に「蝶々とまれ かくもあれ」の句を寄せる。 一〇月二一日、伊勢荒木田氏富を訪ねる（一二 月上旬まで伊勢滞在）。	青蓮院より書道の免許を得る。 四月、『岳西惟中西山梅翁判 十百韻』刊。	九月二四日、月松軒紀子、一八 〇〇句独吟（高政序『大矢数』）。	
同五年	四月二日、西国に「俳諧之口伝」を 授く。 五月二五日、大坂生玉本覺寺で一六 〇〇句独吟（大句数）。 冬、『鳥賊の甲』独吟百韻成。（翌年 刊『珍重集』所収）。	五月二五日以後、「西鶴俳諧大句数」に点を乞 われるが、辞退。裏詞のみを与える。 九月一日、淀屋个庵らと大坂城下屋敷で夕 膳に与る（二月五日・閏二月九日も同）。 十一月、明石藩主松平信之と有馬温泉に遊ぶ。 閏二月三日、伊勢久居藩主藤堂高通に招かれる。 *この年、『宗因七百韻』刊か。	一月、『俳諧三部抄』刊。		
同六年	三月一三日、西国、由平と三吟三百 韻（嗣骨）。 五月一日、惟中宅での初会興行に 出席。発句宗因。 九月、西海、大砲に序を加えて刊。 秋、江雲、松意らと三吟三百韻。『虎 溪の橋』として刊。 秋、惟中と両吟千句、障ることあり て二百韻で止む。 一一月一日、『物種集』刊。 一一月、西虎、旨恕、宗因らと百韻（旨 恕撰『わたし船』刊。 是歳、『三鉄輪』刊。 是歳、『博多百合』刊か。	三月中旬、西鶴ら大坂連衆と「桜千句」興行。 三月、惟中らと四条河原の歌舞伎見物。 三月、宇治興聖寺で旨恕、任口と百韻興行。 三月、京都で任地、旨恕と「江戸桜」歌仙興行。 四月、高政邸で「未茂れ」の発句。 同、「廿日草」独吟三百韻興行か。 五月二二日、大坂惟中宅で惟中、西鶴らと「あ しからじ」百韻。 九月以前、『五徳』刊。 一一月二二日、惟中宅「のらねこや」百韻に一座。 一一月、大坂西虎「さなきだに」百韻に惟中、 西鶴らと参加。 是年、西夕編『三鉄輪』刊。序、独吟百韻を収める。	正月、『一時軒独吟三百韻』刊。 春、大坂移住。 五月二二日、自宅に宗因、西 鶴らを招き百韻。 八月、竹竹堂「俳諧惑問」（『俳 諧蒙求』の普及版）を江戸の 書肆から刊。 秋、西鶴と両吟千句、二百韻 で止む（『太郎五百韻』所収）。 九月、西海、鯛屋貞因とそれ ぞれ両吟百韻。	正月下旬、『一時軒会合太郎 五百韻』『同次郎五百韻』刊。 四月頃、『近來俳諧風鉢抄』刊。 一一月七日、旨恕宅の百韻に、 宗因、西鶴らと一座。 一一月、「俳諧百韻風鸛禪師語 路句」刊。	
同七年	正月二二日、友雪らとの四吟百韻を 東下する公本に送る。 是頃、鎌屋町住（難波すゝめ）。 三月六、七、八日、西六亭で西吟らと 五吟五百韻（西鶴五百韻）。 三月二二日、知足に返状。 四月上旬、西国撰「見花数寄」刊。 両吟歌仙入集。 四月一四日、友雪と「両吟一日千句」。 七月一〇日、知足と俳諧。 八月、一水が大坂の歌舞伎役者・作 者と催した「句箱」刊。友雪と共に 出席。 一〇月八日、大坂天満天神一日千句 興行（『飛梅千句』）。 一一月七日、旨恕宅の百韻に、宗因、 惟中らと一座。 一一月、富永辰寿撰『道頓堀花もち』 刊。宗因、惟中らと出句。	正月一九日、惟中邸の月次俳諧に発句を送る。 五月中旬、伊勢下向。 五月二六日、氏富邸の連歌百韻に一座（六月、 七月二五・二七も）。 七月、宗因連歌千句（『風庵懷旧千句』改題）刊。 一〇月七日、藤波修理宛書状で、連歌俳諧とも 一句も口を出ない旨記す。 一一月七日、旨恕宅の百韻に、惟中、西鶴らと 一座。	正月下旬、『一時軒会合太郎 五百韻』『同次郎五百韻』刊。 四月頃、『近來俳諧風鉢抄』刊。 一一月七日、旨恕宅の百韻に、 宗因、西鶴らと一座。 一一月、「俳諧百韻風鸛禪師語 路句」刊。	三月五、六日、三千風「仙臺大矢 数」成就（八月刊）。 三月、松意編「夢助」。 四月上旬、西国「千本鐘」刊。 一一月、中嶋随流撰「俳諧破邪 と題正」刊。西鶴を「阿蘭陀西鶴」 と罵る。 冬、維舟「俳諧熊坂」刊。西鶴を「ば され句の大將」と罵る。	

同八年	五月七八、大坂生玉社南坊にて四〇〇句独吟。 九日、旨愍の月次俳諧に出座。 九月二〇日、下里知足宛書簡。 九月上旬、摂津梅朝撰「通し馬」刊。 梅朝との両吟歌仙入集。	正月、惟中に評点を請われ、長点を与える。 二月、西吟と上京。江戸より参加した似春、四友と十句興行。 三月、西鶴の「世上の句体をなげ」く（続無名抄）。 五月、大矢数に句を送る。 六月、「なんにもはや」独吟百韻。 七月、伊丹訪問。 七月二十四日、愛宕火見物。	三月月上旬、賀子撰「山海集」に、西鶴、惟中とともに載る。 三月中旬、上京。大和郡山に松平信之を訪ねる。 四月一〇日、帰坂。途中秋風の鳴滝花林園に立ち寄ったか。 五月十九日、西鶴東行百韻。 八月二十四日、上坂した観音寺の宗賢主催の興行に参加。 秋、秋風の花林園を訪れる。 十一月頃、某所山荘に冬籠。 是歳、「宗因発句帳」成か。	三月二十八日、没。享年七八。	三月二日大坂で乗船、一二月一六日まで、伊予、讃岐、備前、備中、安芸を廻る旅に出る。	天和三年、正月二〇日、鳥丸光雄に入門。六月末、「白水郎子紀行」刊。七月、「一時隨筆」刊。俳諧を続けながらも、「諸抄正誤徒然草直解」刊（貞享三年、漢詩讀日集「戊辰試毫」（貞享五年、「頭書真字徒然草」（元禄二年）など多方面へ。物見車（元禄三年）への反論もしない。正徳元（一七一）年一〇月二六日没、享年七三。
同九年 （九月二九日に天和に改元）	正月二一日、知足から日野屋を介し手紙と銀二五匁遣わされる（大坂へ申遣）。 三月下旬、賀子撰「山海集」に、宗因、惟中とともに載る。 春、賀子と両吟花百韻。 五月十九日、西鶴東行百韻。 六月末、大垣を経て江戸に下ったか。 八月二十四日、宗鑑一夜庵再興のため上坂した観音寺の宗賢主催の興行に、短冊寄進。	三月月上旬、賀子撰「山海集」に、西鶴、惟中とともに載る。 三月中旬、上京。大和郡山に松平信之を訪ねる。 四月一〇日、帰坂。途中秋風の鳴滝花林園に立ち寄ったか。 五月十九日、西鶴東行百韻。 八月二十四日、上坂した観音寺の宗賢主催の興行に参加。 秋、秋風の花林園を訪れる。 十一月頃、某所山荘に冬籠。 是歳、「宗因発句帳」成か。	三月月上旬、賀子撰「山海集」に、西鶴、惟中とともに載る。 三月中旬、上京。大和郡山に松平信之を訪ねる。 四月一〇日、帰坂。途中秋風の鳴滝花林園に立ち寄ったか。 五月十九日、西鶴東行百韻。 八月二十四日、上坂した観音寺の宗賢主催の興行に参加。 秋、秋風の花林園を訪れる。 十一月頃、某所山荘に冬籠。 是歳、「宗因発句帳」成か。	三月二八日、没。享年七八。	四月二日大坂で乗船、一二月一六日まで、伊予、讃岐、備前、備中、安芸を廻る旅に出る。	
天和二年	正月上旬、未達序「関相撲」点取歌仙入集。 正月一日、「俳諧百人一句 難波色紙」成。 二月上旬、「俳諧三ヶ津」春、江戸に下ったか。 一〇月中旬、「好色一代男」刊。	三月二八日、没。享年七八。	三月二八日、没。享年七八。	四月二日大坂で乗船、一二月一六日まで、伊予、讃岐、備前、備中、安芸を廻る旅に出る。		
						三月、中嶋随流撰「俳諧猿蓑」刊。 西鶴を「邪流の張本」と罵る。「詩四月」「俳諧綾巻」刊。惟中の「詩書は下手」と批判。 五月、片岡百如「俳諧越前海月」刊、惟中が西鶴の付句を窃んだと暴露。 閏八月、西漁子「俳諧太平記」、惟中を批判。西鶴を「楠西鶴」とする。 九月上旬、西国「雲くらひ」刊。

○参考文献。野間光辰『西鶴年譜考證』（岩波書店・一九八三年）。尾崎千佳「宗因年譜」『西山宗因全集』（第五卷・八木書店・二〇一三年）。江本裕「西山宗因と大坂俳壇（三）」（『近世文芸 研究と評論』八四号・二〇一三年六月）。上野洋三「岡西惟中年譜考」（『国語国文』一九六八年一〇月）。

岡西惟中は寛永一六（一六三九）年鳥取生。幼名平吉、勝、旦ともいう。⁽¹³⁾はじめ松永、後に岡西を名乗る。父を幼時に亡くし、母の手で育てられる。一五歳で儒学者菊池東匀（耕齋）に師事。同時期に俳諧をはじめ。一二歳で儒学を檜川半融軒に学び、二八歳で烏丸資慶に入門。二九歳の時、『心正筆法論』を著す（上梓は二年後）。この頃、岡山に移住。翌年結婚。寛文一二年ころ九州から帰坂した宗因に入門。ちなみに、西鶴もほぼ同時期に入門している。

浪人中の彼は文治主義を掲げる池田光政の岡山で「仕官のため」の宣伝を行いつつ、筆花堂に筆道指南の看板を挙げ、「城下の浪人・連歌師・富商から藩士・藩医の階層を通して、藩の上層部までかなり深くいこんでい」くが、運命は暗転する。寛文一二年六月一〇日に光政が退隠。「寛文末から延宝三年に至る深刻な飢饉もあり」文治の風を数年にして一掃し⁽¹⁴⁾た綱政の時代が将来するのだ。

そんな岡山に見切りをつけた惟中は、しばしば上坂し、玖也、保友、京都の任口、惟舟ら談林の「最長老俳人」と俳諧を興行。延宝三年に『俳諧蒙求』を刊行。同六年春には、大坂道修町西（難波雀）に移住することになる。西鶴をはじめとする大坂宗因圏の由平、幾音、遠舟、一札ら「同世代の若手グループ」とは必ずしも積極的に交わりを求めずに、長老連との交際を選んで求め

ていた⁽¹⁵⁾惟中。「わが名をあらはす」ために、「まっすぐ老師宗因の跡を狙った⁽¹⁶⁾」か否かはともかく、宗因のスポークスマンとして彼が表舞台に躍り出てきたことは間違いない。もう少し彼の年譜をたどろう。

天和元年一月二八日、妻死去。翌年三月二八日、宗因が逝く。直後の四月三日に彼は大坂を出帆し、伊予・讃岐・備前・備中・安芸を廻る八ヶ月以上の旅行に出る（『白水郎子紀行』天和三年六月刊）。天和三年正月、烏丸光雄に入門。七月、『一時隨筆』刊。俳諧の傍ら、『諸抄正誤徒然草直解』（貞享三年）、漢詩歳旦集『戊辰試毫』（同五年）、『頭書真字徒然草』（元禄二年）などを手掛ける。以後『物見車』（元禄三年）の攻撃にも反論せず連歌に傾斜し、正徳元（一七一）年一〇月二六日没、享年七三。墓碑は生玉魂神社に隣接する浄土宗銀山寺にある。

「弱年より碌を干るに意ありき。然りといへども時世不遇、未だ官途に登らず」（『白水郎子紀行』）。人生をこう総括した岡西惟中。それを引用して彼の生涯を「醜くかった」、「すべてが二流であった」と断じた上野洋三は言う、「惟中自身の俳諧は、なぜこうもつまらないのであろうか」、「そこには談林新風の咲笑（大わらひ）が少しも感じられない⁽¹⁸⁾」と。また言う、そのつまらなさは俳論にあつても同じで、虚実論を「うそ、偽」に「横すべり」させた彼の「寓言論の空しさ：彼の俳諧のつまらなさは……どこまで行っても寓言」という単純さにあり、「そこを抜ければ和歌・連歌へ行け」と俳諧を中間的存在に置き去りにし

た点にあると。

思えば宗因没後、元禄期には完全に俳諧と訣別して連歌に転じた⁽²⁰⁾惟中自身が談林俳諧の軌跡を体现していたのであるが、その志向は当初から彼の心にあったものなのだろうか。その問題は当面措くとして、もう少し上野の言葉に耳を傾けてみよう。続いて言う、惟中の「寓言論は俳諧についての新発見ではない。それは底のない梓だけの博引傍証主義の註釈である。そして誤解に基づく文学談義は逆に俳諧の文芸性を見失い、俳諧の面白さを奪ってしまった」と。そして彼には「出世仕官に焦る浪士の硬直した精神に俳文芸の何たるかを、否それ以前に同時代に盛り上がる新風宗因流の要求の何たるかを、理解せしめるのが無理だった」と結論付けるのである。

たとえそれが愛情の裏返しだとしても随分な言われようであるが、ことほど左様に彼の「偏狹な寓言俳諧」(上野洋三)は、評判が悪い。実は上野以前に今栄蔵は、その特異性を見抜いていた。「談林風を表わす俳論用語とし「寓言」の一語だけが取り上げられることが多いが、それは惟中が宗因の言に基き、ことにその表現様式が「莊子」の文体に通ずる傾向を持つている所から「莊子」の文体に対して古くから名付けられて来た「寓言」の語を珍重し、俳論化して盛んに啓蒙宣伝したために、一般によく知られるに至ったものにすぎない。しかも「軽口」が「早口」と混同されていたため、惟中の寓言に対して西鶴の軽口——早口・速吟という考え方が行われ、談林俳諧の統一的理解に

混乱を齎していた。実は寓言も軽口も狂言も、すべて守武流儀の別称だったのだ。そして、それこそが談林の最も特質的な俳風だった。「宗因圈にまつわる古参俳人たちにおいても、恐らく宗因自身においても、正風鉢は依然として正風鉢であり、守武流儀は傍流の慰みという意味で興じあっていたのが実情だったからだ」と推測される。守武流をもつて正風鉢を変革しようとの積極的な意欲が彼らの間にあったとは思われない。「宗因流とは、この守武流儀の俳諧を核心とする無心所着の軽口・寓言に外ならなかった」と。

これを乾裕幸流に言い換えれば、惟中の寓言論は「(軽口)を正当化するための俳理論としてくふうされたもの」であり、惟中は「莊子哲学の寓言説によって、談林俳諧を価値づけよう」としたが、結局は「表現の皮相にとどまり」、「惟中の寓言論は、宗因のそれとはちがって、内に向かうことのない理論なのであり、いうならば外へ俳敵に対して構えられた迎撃用の装置にほかならなかった」となる。どうやら惟中は談林のスポークスマンとしても失格だったというのが大方の評価のようであるが、宗因を神格化するあまり惟中が不当に貶められている憾みはないだろうか。

宗因や西鶴の陰に隠れ、片寄せられてきた感のある惟中。しかし、最近再評価の機運が高まりつつある。川平敏文は言う、莊子の寓言論は虚構の人物やものごとに仮託して自らの思想を述べるという意味で、虚(趣向)——実(思想)という図式をとる

のであるが、惟中は、それを虚（そらごと）⁽²⁾ 非現実的世界、実（ありごと）⁽³⁾ 現実世界へと横滑りさせ、表現論に置き換えた。その背景には彼が摂取した、「実を虚に書なす」伊勢物語学の作物語論（虚（虚構）——実（事実））があったのではないかと。また惟中は「一旦、実（ありごと）の世界に精通しさえすれば、あとは虚（そらごと）の世界を思いのままに遊泳してよいのだと考えた。なぜなら虚と実は結局、同じものごとの両面であり、結局は一つの道理に通じているからである」と。そして、「和歌や連歌が、「理を正しくいひつめ」て、〈ありごと〉の世界から表現するとすれば、俳諧はその逆——〈そらごと〉の世界から表現する」のであり、「〈そらごと〉の世界を通じてまことに至る生き方こそが俳諧の俳諧たる所以であること」を林註の莊子觀から咀嚼し、「〈ありごと〉の世界に通曉した者でなければ、真に俳諧の無何有を追遙することは許されない」と考えていた。⁽⁴⁾ それを踏まえ、水谷隆之は「虚実」を基に宗因風を理論化した惟中の俳論」はややもすれば、「寓言のうそ」（『俳諧蒙求』）という部分のみが一人歩きして、その前提である「実」（『和歌連歌の理、あるいは教訓や模範』の存在を忘れがちであった。だが、北条団水は『好色破邪顕正』（上）で「寓言といふも虚説いつはりをのみいふにあらず。うそをつくを寓言とおもふは僻りあやまれり」と軌道修正し、「惟中の虚実論およびそれに基づく寓言説も、もとを正せば「虚」の世界に遊ぶ俳諧ならではの自由な表現を通して最終的に和歌・連歌の道と同じ「まこと」に

至るのだと主張した」とする。⁽⁵⁾

他にも、〈ぬけ〉の本質を惟中の『近來俳諧風躰抄』中に探る牧藍子の研究があり（後述）、先日大江あい子は惟中の『俳諧蒙求』が『しぶうちわ』への反論書の一つであり、そこには俳諧師への転向を決意した惟中の思いが託されていると述べた。⁽⁶⁾ 惟中は談林俳諧史の徒花だったのか、それとも再評価すべきなのか。彼の著作を改めて読み直してみよう。

四

「甚だ乱暴」と評された『俳諧蒙求』（延宝三年四月）の最大の特質は、従来の俳諧作法書には見られない自在さにある。そのことは、季吟の『埋木』などと比較してみれば明らかであろう。彼我の差を一言で述べれば、それが作法書にありがちな駄目駄目尽くしの窮屈さを有しているのに対し、こちらは一見のどかな雰囲気が漂うのである。

彼は言う「俳諧といふは、たはぶれたること葉の、ひやうふつと口よりながれ出て、人の耳をよろこばしめ、人をしてかたりわらはしむるのこゝろをいふなり」と。俳諧は力を抜き、何よりも自然体であることが求められているのだ。気楽に戯れ、笑い笑わせるための装置。だから、「俳諧と滑稽とひとしき名」ということになる。

そうした考えは、当然句作にも反映する。「自由変化の趣向をおもひめぐらし、ある事ない事とりあはせて、活法自在の句

躰を、まことの俳諧としるべし」と。「ある事ない事」、すなわち実と虚（ありごと・そらごと）を混交させ「活法自在の句躰」を具現化する取り合わせの妙とは何か。惟中は言う「（余が師、西翁の書こし給ふ文のうちに）紙子にしきのありさしたるやうに、一興あるを俳諧」と。

異質なもの同士のおつかり合いが生む、アンバランスの美。「或時（天和屋）甚兵衛宛久をまねきて、何か望み物ありやと尋ねければ、紙子紅うら付けて物まねをする事ならば、其外に願ひはなし」（「宛久一世の物語」下「水は水で果つる身」貞享二年）という西鶴の記述を彷彿とさせるが、ともかく「俳諧は常をやぶり、俗をみだること葉」（下）で人を驚かすことを目指すのだから、「唐になきよしの、の山を、もろこしのよしの、山とよ」むような発想の転換が不可欠であり、一見無関係なものの、対極にあるようなものを取り合わせて予想だになかった新奇な世界を現出させる点にこそ俳諧の妙があるというのだ。そうした文脈に従えば、伝統的な和歌や連歌の世界で排除されてきた「無心所着」も許容されることとなる。「正躰なきやうなるも、俳諧の寓言」、「すべて歌・連歌におゐては、一句の義明らかならず、いな事のやうに作り出せるは、無心所着の病と判ぜられたり。俳諧はこれにかはり、無心所着を本意」と。

後に惟中は「岑参が作に、孤燈然客夢。寒抒搗鄉愁。孤燈といふ二字も、むかしのつゞき字なり。然の一字の作寓言なり。ひとつの燈にむかひ、ほち／＼とねぶり、たび寝の夢をみたる

ことを、夢をもやすと作りぬ。下句の寒抒も、郷愁も、古き字なり。搗の一字寓言なり。故郷をおもひつゞくる折ふし、きぬたの声するは、我故郷の思ひをた／＼と作りしなり。これにてよく／＼詩歌の寓言を知るべし」（「続無名抄」上）と記すことになる。すなわち、「孤燈」「寒抒」「郷愁」といった古語が支配する伝統的で格調高い詩境とは一見相容れないように思える（然、「搗」。それら突飛な動詞の使い方が、これまでの詩境を一変させ、斬新で絶妙な世界を創出すると説くことになる（古事・ものがたりをも、あらぬ事に引たがへて續案する）。伝統的な美学を保持しつつも、その面目を一新させる魔法の一語。いわば「ピシクモーツァルト」「小麦色のマーメイド」といった突飛な取り合わせと、それが人々に与える驚きと効用を三〇〇年以上も前に先取りしていたのだ。

問題は取り合わせや配合の妙を説いた右のような方法が虚実論を挟み、「寓言」の一語に置き換えられてしまったことにある。「ものいはぬ鶯・時鳥にものいはせたる作、則『莊子』が寓言。」「犬つくば」に載る「ほとけもののをひたまふかな／嵯峨の釈迦しやくせんだんと聞柄に」の句に關し、この一句、莊子が寓言、俳諧の根本也。仏はものをおはぬものなれども、わざとものをおひ給ふと作意す。さりとては俳諧なり／＼」。惟中はこうした表現上のさまざまな創意を、「寓言」と呼んだ。普通に考えれば、これは寓言的表現方法であって、寓言そのものではない。彼は寓言の意味を誤解していたのだろうか。いや、おそらく違う。と

いうのは、一方で「寓言とは、我心に思ふ事を、物に比し、事に託して云ひ出すの義」(『俳諧或問』延宝六年)と書いているからだ。いずれにせよ、彼は寓言にこだわった。悪評の所以であるが、頼原退蔵は惟中をこう評価する。「単に新風の外形だけに魅惑されて、無自覚に動いて居た者が多かつた間に、かうした一の定見を保ち、その論拠に立つて組織的な言説を樹てた事は特筆すべきである」⁽²⁸⁾と。ともかく、惟中の自注「独吟三百韻」(延宝六年正月上旬序)に、寓言の具体例を探って見よう。

五

1 岩まくらみとりのこけのむしろ敷(「自注」略)

おしろいそ、ぐ宇治の河つら(哥に朝日山うつろふなみのいはまくらまたそめやらぬうちの川水。一句はつらにぬりそ、きたる白粉寓言躰也。*括弧内は惟中の「自注」)(二)

2 御たち有はほうくまゆにうす霞(同右)

ひたいにつくる明ほの、やま(女のひたいの山のかたちに似たる)宗祇の発句に遠山のまゆすみ青き雪間哉ともあり。一句は寓言也(三)

3 なへすみこさけて人はこたへす(やり句也)

六十棒あたへられたる火うち石(なへすみにうち火也。禪人の問答して疑議する時、六十棒をあてたる也。一句は例の寓言躰也。火うち石という字、燧スイの一字也)(三)

4 しつかりとしたいらたかの念珠ズ(やり句也)

しやうふのり役の行者のあとをつき(しつかりとしたに、しやふのりにてつぎたる也。いらたかにゑんの行者也。役の行者は和州葛木ノ上ノ郡冤人カチ也。役ノ小角といふ也。山伏の祖とする所也。一句は例の寓言也)

掛ものにするかつらきの雪(しやうふのりにかけもの也。役の行者にかつら木也。一句のしたては寓言也)(三)

5 半夜燈火の花をこそ見れ(く付心は灯のもとにてのはくちなり。

山又山を分るに花をあしらひたり)

さんふりと湯つほに入し春の月(湯つほの灯也。花に春の月を付一句は寓言也)

いつそやほねのかへるかりかね(かりがねほねをたがひて酒に入たる也。春の月に帰雁常の事也。一句は寓言也)(三)

1の本歌は惟中が提示するものと微妙に違うが、「朝日山うつろふなみのいろはかりまたそめやらぬうちのかはかせ」(家隆「建保名所百首」、『壬二集』など)だろうか。ともあれ、彼は俳言「白粉」で擬人化し見立てることを「寓言躰」と称している。

2は惟中が明かすごとく、宗祇編「竹林抄」に載る賢盛の句「遠山のまゆすみ青き雪間哉」を踏まえたもので、1と同想。本歌自体が壮大な見立てとなつてゐるのであるが、ここでも山や霞を人の顔に見立てることを寓言と称している。3は「里ひたるいんのこくいぬの声」という前句に対し、鍋底にこびり付いた鍋墨を削り落とすのに懸命なので犬が吠えるのにも反応しないと付ける。「六十棒」は惟中によれば禪問答で疑義を生じた

際に用いるというので、「鍋墨」に燧石で打火する様子をそれに見立てることを「寓言舂」としている。4は「へんけのもの」これもこくうに落けるか」を受け、それは苛高数珠を揉む役行者者であるとし、「役行者」ゆかりの葛城と同音の「桂木」に積もる雪はさながら一幅の掛軸のようだと見立てる。

5は「掛もの」を博奕（賭物）に転じた前句「博奕銭山また山を分こへて（行けば程なく葛城山に着きにけり）」（謡曲「葛城」）を受け、「半夜」（夜中までもとる燭台）の許での博奕風景（「花」はカルタの組札。湯壺の灯を春の月に見立てることを「寓言」としている。続いて春の月に帰雁をあしらう一方で、胛骨（肩甲骨）を入れた骨酒を見立てている。これも寓言とする。

こうしてみると、惟中が寓言と称するものの内実はほぼ「見立て」に収斂することが判明する。頼原退蔵がこう述べていたことを思い出したい。「俳諧に於ける滑稽が寓言と解されるべきものであるならば、従来の如く只管用語の通俗性にのみを、か^かしみを求める事は出来ない。かの一種の見立ともいふべき譬喩的手法が、談林で盛んに用ひられるに至つたのもその為である」と。俳言による可笑しみから、比喻仕立ての面白さへ。たしかに、寓言はその名のごとく、寓^{かこ}け、擬える対象が不可欠であり、二者の並立が基本であった。それゆゑ頼原が指摘するごとく、「対象の特質を深く鋭く捉へて、象徴的な表現にまでも進んで行くならば、そこからすでに蕉風俳諧への展開も」有り得た。だが実際は「素直な自然観照の中から生れた譬喩ではなくて、専ら

主知的な解釈に基く見立⁽²⁾」にとどまつたのである。

右は談林全般に対しての総括なのだが、とりわけ学者肌の惟中に顕著で、ややもすれば理屈が先立ち、頭でつかちになりがちであった。そこが、「俳諧は下手さう也。宗因流はかる口なるこそよけれ（中略・惟中の句は）句舂おもくくし」（「俳諧綾巻葛城山正井」評判）延宝八年四月）と評される所以だったのかもしれない。もちろん、惟中が寓言と呼ぶものは「見立て」に限らないし、「おもくくし」い句ばかりが、『独吟三百韻』に収められているわけでもない。

6 なにの子細かおはしますへき（やり句也）

月花に風のか、ちと思しめす（かろき風邪なれはなんの子細もなしと付たる也。月花に風の字似合しきもの也。一句は例の寓言）

かすみのころもうす着しつらん（いかにも聞えたる句也）（二）

右は「請人を興範しきりのたまへは」という前句に対し、「何か事情があつたのか」と付けた「やり句」に、自然を象徴する月、花、風をあしらひ、「風」を「風邪」に転じて、「単なる風邪だから心配ない」としたものの。ここで言う「例の寓言」とは、言葉の多義性を利用して、雅語の「風」を俳言の「風邪」に転じたことを指す。ここでの寓言は、見立てから一步踏み込み、雅から俗へと垂直的に落とすレトリックを意味すると考えれば良いだろうか。ちなみに、その後は「霞の衣」ゆゑ薄着なので風邪をひいたとしている。

7 天下ふまゆるあしからの山（二にきりに天下ふまゆる也。ふし

にあしから常の事也)

堂の矢数かよひし中のとめて(矢数の天下也)

おとこにもせん器量こつから(器量こつからのすぐれたるおとこ矢数をゐたる也)(三)

8 かたきをは秘すへし／＼うつきぬた(略)(三)*「ぎ」ねの沙汰は秘すべし／＼「西翁十百韻」下

9 はらみしは色に出たるむら紅葉(略)

五文字にはや秋をしるらむ(哥の五もしをはらみたる也)(三)きいたやうな句のあきの初かせ(略)(二)

10 通し矢(7)に言及し、宗因風の表現(8)を用いる熱狂の奥に垣間見える、「孕み句」(9)や「きいたやうな句」で飽きるという冷静さ。そういえば、6でも「いかにも聞えたる句」と自己分析していた。自作に醒めた視線を注ぐ惟中のメンタリテイは注目していい。

ところで、彼は「発句、脇、第三は天地の三才をかたとる。発句は天、脇は地なれば、発句のころをよくうけて、建立するをよしとす」。第三は長高^{タケタカ}躰を本意とすといへり。四句目はかろ／＼とするをよしとする也。月^{ツキ}は面の定座也。八句目は付心かろきをよしとす」と書くが、その作法は『俳諧蒙求』の著者とは思えないほど保守的で、季吟の次の記述とも微妙に重なるのである。「紹巴法眼の云、脇は発句にかいそひて句がらをたけ高く」、「第三は脇の句によくつき候よりもたけ高きを本とせり」四句めをば脇の句より引さげてやす／＼と付候、

八句めは詞につまり候故に何となくかろがると幽玄躰をもて付候」(『俳諧埋木』延宝元年)。惟中の中に混在する、自在さと保守性。そうした眼で改めて『俳諧蒙求』を読み直すと別の側面が浮かび上がる。

六

比喩や見立てに寓言の顕現を見た惟中。なぜ寓言に拘泥するのか。ここでも彼は、宗因を引き合いに出す。すなわち、莊子の像に賛を施した宗因が、俳諧は「連歌の寓言」と述べた。また『莊子』(逍遙遊の篇)林希逸が註)には「読莊子其实皆寓言也」とあるが、それはまさに文学の中枢をなすもので、『古今集』俳諧の部の和歌も、寓言を本意」とし、『源氏ものがたり』のうち、若紫、末つむはな、皆寓言』であると。そして、「守武没してのち西山の翁、その伝をつぐ」(上)と述べて、守武流寓言の系譜に宗因を置くのである。

一見、「どこまで行っても寓言」(上野洋三)と思える、惟中の俳論。だが、必ずしもそうとは言いい切れない。「守武が独吟のおく書に、俳諧とて、みだりにし、わらはせんとばかりはいかん」(上)とあり、「百ゐんながらに、寓言の俳諧をいひつゝくる事はかたかるべし。五句十句は、たゞ俳言の躰をもちゐて、目前の境界をいひ、また世俗の情を申つゝくるも俳諧」(下)と記してもいるからだ。ちなみに「目前の境界」や「世俗の情」にも条件がある。「かぶき子・狂言師の名等、ばさらにもちゆ

る事、かたく禁ずべし」、「いかにたはぶれたる俳諧なればとて、親一門の中にとり出して、よまれぬほどの句躰ならば、いみさくべし」(上)と。

放埒をコントロールする、最低限の品格。「ひやうふつと口よりながれ出て、人の耳をよろこばしめ」、「ある事ない事とりあはせて、活法自在の句躰」であるはずの俳諧に、なぜそんな規制が必要なのかといえ、あまり下品に流れると上流層が俳諧から離脱するからである。

惟中の懸念はすぐ的の中する。「いまの俳は下より下ぎまの二蔵・三八のもてあそびとなりて、かたのごとく座輩・席つきもいやしくなりもてゆ」き、「たゞきのふけふのばさること、芝・嶋原等の分なき詞をいひちらし、おもしろがれども、禄を得て君につかへ、官を得て宮づかへするほどの人、門跡・和尚等の高僧、なにに分ある事やらんしろしめさねば、興あるやうには思しめさず」、「連哥の道にいらせ給ふとぞ。是、俳諧のいたましき所也。よくく思慮すべき事也。たゞ一人にても高家・大名のすかせ給ふやうに仕習ふべき事」(「近來俳諧風躰抄」下延宝七年)と。それゆえ「俳諧は常の詞の俗をもちゆれ共、俗中の俗はこのむべからず。俗にして俗ならざる詞、よくく工夫すべし」(同)と警告することになるのだ。

『俳諧蒙求』に話を戻そう。惟中は言う、「当時の俳諧に、いまやうの浅くしき事おほくこのみて、あたらしとおもふものあり。古きをたづね、もとの語勢にすがる心もなくして、学

問と俳諧とおなじくしたる」(上)と。「もとの語勢」とは何か。誤解を恐れずに言えば、それは広い意味での古典の力ではないだろうか。もしそうなら、俳諧にはそれを備える教養が不可欠となる。「歌も連歌も俳諧も、才智なく文盲にして、なんぞ堪能の名をも得、上手とも人によれんや」、「いまの俳諧はばさること、のみこゝろへてするにより、あるは連歌しのそしりにあひ、あるは歌よみのにくみにあへる事也。これ俳諧師の学文せぬ故也。されば、このごろ西翁先生の書こし給ふ文のうちにいまの俳諧は、みな根葉なき句のみにして、たゞかる口ばかりこのめるにより、このましからずと」(下)書いていたと。

宋因がそう書いたか否かはともかく、この「根葉」がくせものなのだ。それと「ぬけ」との関係については次節で述べるとしても、このように文脈をたどれば、良く知られた本書中の「虚を實にし、実を虚にし、是なるを非とし、非なるを是とする莊子が寓言(中略)おもふまゝに大言をなし、かいでまはるほどの偽をいひつゞくるを、この道の骨子」という発言も違った響きを持つことになる。「(俳諧は)古事・ものがたりをも、あらぬ事に引たがへて譚案すると、寓言のうそをつく」と、これふたつを本意とするべし」(下)とあるごとく、「寓言のうそ」は「うそ」そのものではないのだ。それは「ある事ない事とりあはせ」るための、趣向としての「うそ」、見立て、取り合わせられた方法としての「うそ」なのである。

そういった意味で、水谷隆之が「寓言のうそ」(「俳諧蒙求」

という部分のみが一人歩きして」と見たのは正しい^③。ただ団水がそれを軌道修正したわけではなく、惟中は「寓言のうそ」の本質を弁えており、元々軌道は逸れていなかったのだ。そういった意味では、「寓言と偽とは異なるぞ。うそななくみそつくりごとな申しそ」(団袋)という西鶴の発言は惟中の真意をとらえていたと言える。ただ、それが韻文で実現可能と思っていたか否かは別問題でもある。

また、虚実を「同じものごとの両面」(川平敏文)と見ていたという点についての判断は保留するとしても、「(和歌の庭訓と連歌の方式をもて、俳諧のてにはまであまりに難じすぎ、吟味にをちぬれば)俳にもあらず諸にもあらず、ひたすらに連歌にひとしくなれる事なり」(上)、「俳諧と連歌とのわかち、たしかにありてこそよけれ」(下)という記述からは、俳諧を和歌、連歌への「階梯」(上野洋三)と考えていたとは少なくとも『俳諧蒙求』の時点では思えないのである。別ものだからこそ、存在意義があったのではないのだろうか。

ところで、本書の跋を依頼された任口はそこを「寓言万事任西翁之馬」と結んだ。彼は『一時軒会合／太郎五百韻』(延宝六年五月一二日興行)で、次のような句を付けている。

成敗にはら(は) たをたつ猿の声(一) *意馬心猿
いふにいはれぬ我ま、大名(任口)
直な竹もまけたいやうに曲る籠(同)
立腹し成敗に走る「我ま、大名」。任口が「大名」に抱いた

イメージ。後述することく、それは西鶴のそれを先取りしてもいたのである。

七

当風のぬきをやりてん霜ばしら 梅翁(『近來俳諧風鉢抄』中)

惟中は「一句にあらぬ事をいひ出る事、俳諧也」と述べ、「當時なぞく」の鉢、ぬけの句鉢とて、はやり事のやうにおもへども、元来はもろこしの詩・やまとの哥にもある事」としてその起源をたどり、「鹿を追ふ獵師か今朝の八重霞」などの例句をあげて、「ぬけ」を説く(同・上)。牧藍子はそれを踏まえ、「ある語を一句の中に直接詠み込まずに、それと聞こえるように句作りする手法」、「典拠となる表現の一部を表に出し、別の部分を言外に暗示する談林の手法」と「ぬけ」を定義し、「一句のテーマにあたる語を直接詠み込まずに、全体から暗示する手法は、和歌において既に確立した詠みぶり」であるが、「俳諧の「ぬけ」は、ぬかれた語を補うことで、一句がうまく解釈可能となるという点に関心の向いた表現」という点で和歌や漢詩の手法と逆であり、「謎解きの面白さと、それに付随する人を驚かすような表現の斬新さ」を持つ一方、「謎解きのバリエーションは豊かであるけれども、独りよがりの難解句になる危険性も高い」と述べ、「(「ぬけ」の句には) 基本的には和歌や諺をふまえて、その語句の一部のみを句の表に出した句が多い」と指摘する。

思えば、この「ぬけ」こそが上流層の俳諧離脱を食い止める切り札となるはずのものであった。「ぬけ」の解説には古典についての素養が不可欠であり、文化的コードの有無が俳席への参加資格を決めることになるからだ。だがそれは同時に、多くの人々を誘因した親しみやすさ、間口の広さという俳諧の特質を失わせかねない危険な両刃の剣だったのでもある。

高度化する謎は時として術学性を漂わせることがある。実際、惟中は「古詩・文章の詞をふまへて仕立たる句、古今不朽の一鉢」、「本哥を取たる一鉢、古来よりの上品」、「諷の詞を取る用る事、二十年に及べり。俳諧のためには、連哥の源氏になぞらへて、宝」(中)と並べ、何かを「ふまへて」「取たる」本歌取り的な手法にもグレードがあることを指摘している。

既に述べたごとく、何かに「寓^{みか}け、準^{もつ}え、見立てる」ことが、惟中の寓言の内実だった。問題は、その「何か」のクオリティであり、それにこだわり過ぎれば「連歌めきし」とは厚き俳諧(『玉池雜藁』)と宗因が説くごとく、厚みの分だけ句が重くなる。惟中自身も「口にとなへてなだらかならぬは、下品とおもふべし。連歌もたゞやすらかなるを本道とするなり。俳諧とても同じこと」(『続無名抄』上)と自覚しながらも、「世の中や蝶々とまればかくもあれ」「世の中のうさ八まんぞ花に風」と詠む宗因の洒脱な「古典に裏打ちされた言語表現のセンス」^③を備えるには至らず、実作は「句鉢おもくし」(『俳諧綾巻』前掲)いものとなつてしまった。

「(宗因の)其徳自然と門人に及びたればこそ、度々の席ゆるやかに、各花をゆづり月を残して、うつくしき事」(『近來俳諧風鉢抄』上)と和を重んじた俳諧の場に持ち込まれた、知恵比べ。そこに集う人々の多くが連歌の門人で有産知識階級であり、「中産町人階級の出と推定される西鶴には、彼らと対等に交流する経済的基盤も学殖もなかった」とされるが、^④惟中も似たような状況であつたのだ。二人の暗闘ぶりを具体的にしよう。

八

あしからしとて杜茂れ難波の住(梅翁)

おさし図次第に作る鴨の巢(一時軒)

大普請庭の池水岩ふれて(益翁)

色はみどりの松のふしなし(由平)

きけはまた時雨の初の諷講(西鶴) (太郎五百韻)

『大和物語』(「あしからしとてこそ人のわかれけめ」一四八段)の一節を借りて惟中の大坂移住を祝す宗因の発句^⑤。宗因の指導に従い俳諧に精進することを誓う惟中。惟中庵(一時軒)の完成を祝し、その立派さを称える益翁(「おちたぎつはやせの河もいはふれてしばしはよとむみだともがな」新勅撰)と由平。西鶴は松を歌唱の「節無し」にとりなす一方で視覚を聴覚に転じ、初時雨を突いて響く謡の声に自分たちのそれを重ねる。もしそれが「わが恋は松を時雨のそめかねて真葛が原に風騒ぐなり」(『新古今』一一)を踏まえたものなら、「風騒ぐ」のは惟中というライバルに對峙

する西鶴の心だったのかも知れない。

露はこほれておもき引うす（旨恕）

神鳴かなにそと人の問し時（貞因） * 「白玉か何ぞと人の問ひ

し時露と答へて消えなましものを」『伊勢物語』 第六段

打てば響くような小気味の良いやり取り。根底にあるのは、共通コードを有する者同士の信頼と安心感である。そんな中でも西鶴の個性は突出し、次のごとく木村長門守重成を新町の太夫長門に見立て、その落差に俳諧性を際立たせる。

霞たつ松皮木村長門あり（梅）

その、胡蝶も舞責のうち（西）

と。注目すべきは惟中と西鶴のアスリートのごとき応酬であり、惟中の変化球に『鶴』で応えた西鶴の反応などは実にスリリングでもある。

矢さきにあたり帰る鳥の音（二）

替りもの尾はくちなはも動出（西） * 「頼政が矢先に掛かり、

命を失ひし鶴と申す者」〔謡曲「鶴」〕

惟中は言う。「爰に入道あり、西鶴と名のる。ある日余に会し、秋の発句十ならへ、千句の両吟せん事をのそむ。されともさはる事ありてやみぬ。さりとて、僕か瓦礫の句はなけはふらんもいたましからねと、かの入道か金玉の詞をいたつらにくたさむは口惜し（と）て梓にちりはめぬ」と。千句の予定を二〇〇句で中絶させてしまった「さはる事」とは何だったのだろうか。それを両吟中に探ろう。

1 金の御幣は握てはなさぬ（二）

大矢数その日閑に花の風（西）

2 佐保姫の一足あゆめはあいたしこ（西） * 「さほひめのとこのうらかぜふきぬらしかすみのそでにかかるしらなみ」（藤原光俊 続古今）

後 続古今

寝させてをけい床のうら風（二） * 「わがそでにむなしき浪は

かけそめつ契もしらぬとこの浦風」（定家 続後撰）

3 首引て志賀の浦半を詠んや（二） * 「さざ波や志賀の浦わに霧

はれて月すみわたるからさきの浜」（鳥羽院 後拾遺）

まくら絵になる旦妻の里（西）

本の時風やとくらん下の帯（二） * 「袖ひちてむすびし水のご

はれるを春立つけふの風やとくらむ」（貫之 古今集）

4 なにもおとさぬかこしの白山（二） * 「白山に雪降りぬれば跡

絶えて今は越路に人も通はず」（後撰集）

かね秤しるしの竿は立しかと（同）

秋の霜ふむあきなひの道（西）

さそ傾城鶉と成てなきをらん（二） * 「萩が花たれにかみせん

鶉なくいはれの野べの秋の夕暮」（前内大臣師 続拾遺集）

5 是非髪きれといはれの、月（西）

されは候治承四年の比はとて（二） * 治承四年頼朝挙兵。（謡

曲「頼政」）

さしに懸つてうたひそこなふ（西）

6 天乙女知音くらへの空の月（西）

ゆひきりかねきり通路の露(一) *「あまつかぜ雲のかよひち

吹きとちよをとめのすがたしはしとめむ」(良岑宗貞 古今集)

7 狼や出て我まゝの野への花(西)

句躰も秋も千里同風(一)

8 一盃のんた浅沢の水(一)。

通し矢というトビツク(一)。「さ」を姫のはるたちながらしとをして「大つくば」などを意識してくだけた西鶴に、古歌(「このうらかぜ」)で応じた惟中(二)。同じことが3にも言える。古歌を踏まえて琵琶湖東岸朝妻の景色を詠む惟中に対し、朝妻船における遊女との性技に落とす西鶴。その世界を引き継ぎながらも頑なに古歌を踏む惟中。4も同様であるが、惟中自身が腰(越)の金を承け雪竿を天秤に見立てた前句を踏まえ、西鶴はそれを商人修行とする。古歌を踏まえ、商人修行に出されたのは大尽で、相方の遊女は嘆いているとする惟中。「いはれの奈良県桜井市磐余」を「言はれ」に変え、心中立の一場面とした西鶴。5では惟中の投げたボールを西鶴は頼朝挙兵(謡曲「頼政」。「風ひかれ 抑治承の夏の比」「大句数」九・「二葉集」にも有)と読み、「うたひそこな」ったと切り返す。両吟は「知音くらべ」(6)ならぬ、知恵比べでもあるのである。

だが、ここでも惟中の心にある醒めた部分が顔をのぞかせ。奔放な西鶴に対し、すべてがマンネリで飽きたと呟く惟中(7)。そうしたやりとりではじまった二百韻目の揚句を惟中は、「一盃のんた浅沢の水」と結ぶ(8)。埋めがたい懸隔。「さはる事」

の内実は、西鶴の「浅」い教養に対する惟中の不満ではなかったか。

惟中にあつては無為に終わつた両吟体験。だが西鶴は違う。中絶の苦しい思いは、後の浮世草子に繋がる猛勉強を促したであろうし、惟中と同じ土俵で競つても俳諧師としての未来はないことを痛感したのではないだろうか。「才能は一つあれば良い」(映画「タイピスト」というが、生活者としての彼の強みは「俗」に対する知識と、「今」を切り取る豊かな語彙にある。饒舌を支えるスピード。西鶴の資質を最大限に生かす、矢数俳諧というフィールド。そうした場で、彼は躍動する。達成された、四〇〇〇句の独吟。惟中のものとは、一見異質と思える世界がそこにある。

1 人目も恥よ後家のいたづら／死別れ生てわかる、かねの声(六)

2 是は又葉違ひの花にかせ／柳の髪がぬけて元山／さは姫に縦敷銀付とても(五)

だが、2の「さは姫に」「敷銀」を付けるという発想は惟中の言葉を借りれば寓言ということになるし、むしろ自己を対象化する醒めた視線などは驚くほど惟中と通底するのである。

3 つれづれの心付には長点か／下戸ならぬこそ明日の朝(二〇)

4 線香立てまどろめる内／不思議なる俳諧共が顕はる、(三二)

5 胡蝶の行方今にしらぬか／たゞ古い付合計夕間暮
(二二)

6 大矢数にははづれじ難波鶴(久永)／むだ口叩水鶏の
勢力(二四)

ただ、決定的に違うものがある。それは、こんな句に典型化
される。

7 此奢上戸の喉の沖の石／さては殿様末の松山(七)

思えばその三年前、西鶴は次のように詠んでいた。

8 春の野や我物にして公儀ぶり／出頭人はきみがためな
り

9 しるもしらぬも中がよいとの／さりとは脇より用る
公儀ぶり

10 堤せかする功德池の水／御代官爰をさる事遠からず

11 稲葉をみだる北国の風／加賀殿の御下の露ははらりさ
ん(俳諧大句数)延宝五年

「貧寺や檀那次第のころもかへ」。伏見の貧乏寺(西岸寺)の
住職であり、談林派の長老でもあった任口は檀家次第の不自由
な経済状態をこう自嘲的に詠む一方で、思うままに「成敗」し、
「直な竹もまけ(曲)たいやうに曲る」「我ま、大名」をも齒に
衣着せず詠んでいた(前掲)。談林派の一部に存在した「社会派」
の遺伝子は、しっかりと西鶴に継承されているのだ。西鶴は権
力にどんな印象を抱いていたのか。「大矢数」から少し挙げて
おこう(数字は巻名)。

頭は猿与力同心召連て／比穿鑿に腸をたつ(二三)

心の水に公事工みする／鈴鹿川深ひ所がどうよくな
(二五)

公家の知行はいにしへの事／八重桜たとへ折ふと曲ふと

(二六)

千貫目手形まぎれて箱伝受／猛き武士家老がわるひ

(二九)

爰は又中大名の御泊り也／進上肴箱根路の末(二二)

御公儀の御触きいた時鳥／牢人置な卯の花の宿(二三)

此朱印いざもろこしの人に見せん／上意を以て隅からす
みまで／御物あがり今は毛抜や恨むらん(二四)

大名の御手が懸つて産出して／恋の重荷や当坐に千石

(三〇)

それ公家の跡へ下つて引にけり／色のこじろい山鳥の声

(三一)

二十余年は思はくの秋／手形借反古になさつて雁の声

(同)

巡見衆の暮の中宿／物買ず物を餉はず物請ず(三四)

小納戸衆は風の音する／さく花を散せぬま、に御為づく

(三六)

上様の在所見てきて立霞／米なら金なら銭なら蔵なら

(同)

夫鱗も終に俎板思ひしれ／旗本衆はあら波の音(三七)

延宝八年五月刊の『備前海月』は、こう書いている。「このごろの俳風、いろ／＼まち／＼なる物を、たゞなげかはしきはむさと寓言／＼とて、そでもなき古言のかたはし、しかも句作りかたく、或は詩、或は法語のきつぱし、面白からぬ仕立、かゝる事のみ一偏このみでは、この道の末と云ものなり」と。

一方で、西鶴の弟子でもあった西国は「俳諧の作意も、きのふの趣向は今日の過去となり、今日現在の作意は明日未来の句躰に引合せば、次第／＼にふるくならん。後々年数をへるにしたがつて、趣向もつくる事あるべしといふ。答曰、何として浜の真砂子はつくるとも、一作句躰は天地と同躰にして、千万億無斗の年を重ねるとも、いい尽すといふ事なし」(『雲喰ひ』延宝八年九月)と書く。

延宝八年という年はさまざまな意味で分岐の年でもあったのである。

注

- (1) 大谷篤蔵「西鶴の手紙」(『連歌俳諧研究』二号・一九五二年二月)。
- (2) そこには「天満の翁(引用者注・宗因)に点を乞侍るに、かゝる大なる事にはと辞退あつて、唯褒美の詞をなんそへられけるはかりなり」とあるので、西鶴の言に従えば「褒美の詞」はあったとも考えられる。ただし、現存しない。
- (3) 尾崎千佳「宗因年譜」『西山宗因全集』(第五巻・八木書店・二〇一三年)。

- (4) 暉峻康隆「頭注」『定本西鶴全集』(一一巻下・中央公論社)。
- (5) 前田金五郎「西鶴大矢数注釈」(第一巻・勉誠社・一九八六年)。
- (6) 大谷篤蔵・注(1)と同。
- (7) 野間光辰「西鶴年譜考證」(岩波書店・一九八三年)。
- (8) 前田金五郎・注(5)と同。
- (9) 島居清「西鶴と宗因」(『国文学 解釈と鑑賞』一九五七年六月)。
- (10) 加藤定彦「宗因と西鶴」(浅野晃・谷脇理史編『西鶴物語』有斐閣ブックス・一九七八年)。
- (11) 『西山宗因全集』(第四巻・八木書店・二〇〇六年)所収。
- (12) 尾崎千佳・注(3)と同。
- (13) 以下、上野洋三「岡西惟中年譜考」(『国語国文』一九六八年一〇月)に拠る。
- (14) 上野洋三「岡西惟中論」(『文学』一九七〇年五月)。
- (15) 米谷巖「惟中の上阪と西鶴」(『広島大学 国文学攷』二二号・一九五九年一月)。
- (16) 上野洋三・注(14)と同。
- (17) 奈良県生駒市宝山寺蔵「扶桑残葉集」(明治一四年写)には次のものが収められている。「告天満宮文」(西山宗因)「東の紀行」(同)「富士記」(雛屋立團)「東の紀行」(同)「嵯峨の記」(同)「清水寺花見記」(同)「有馬山西吟五百句序」(西順)「仮名文字書様大意序」(渡辺素平)「小西氏利文」追悼百韻序(惟中)「宝樹山銀山寺興隆」(同)「靈岑庵銭観音縁起」「蓬萊山清澄寺縁起」(同)「夫木抄全部写せる人によする序」(同)「和紀記行」(同)「寄森河内屋文」

(同) 他に「上田秋成にこたふる文」(藤原宇万伎)「水夜里花」(上田秋成)「十両言」(同)「何かへ贈る消息」(同)など。

(18) 上野洋三・注(14)と同。

(19) 上野洋三・同右は惟中自身が述べた以下の記述を根拠としている。「余俳諧の月花をなかめすて、」(高井立志編『難波の枝折』序・元禄五年)、「余がすてはてし俳諧」(桃源川編『花皿』元禄一六年)。

(20) 島居清「片岡旨恕」(『国語国文』一九五四年七月)。

(21) 今栄蔵「談林俳諧史」(『俳句講座1』明治書院・一九五九年)。

(22) 乾裕幸「俳諧師西鶴」(前田書店・一九七九年)。

(23) 川平敏文「寓言—惟中と伊勢物語学」(『江戸文学』三四号・二〇〇六年六月)。

(24) 川平敏文「俳諧寓言説の再検討—特に林註莊子の意義」(『文学』二〇〇七年五、六月)。

(25) 水谷隆之「西鶴と団水の研究」(和泉書院・二〇一三年。初出は『近世文藝』八一号・二〇〇五年一月)。

(26) 大江あい子「貞門系俳書と『俳諧蒙求』の關係—「しぶうちわ」を中心に—」(『俳文学会六五回全国大会・二〇一三年九月二九日』。当日は参加していないため、概要は発表資料と廣木一人氏の御教示による)。

(27) 仁枝忠「岡西惟中の俳論 附『俳諧蒙求』『しぶ團返答』『俳諧破邪顕正評判之返答』の乾注拾遺」(『津山工業高等専門学校紀要』一四、一五号・一九七六年)。

(28) 頼原退蔵「俳諧史の研究」(『頼原退蔵著作集』第三卷・中央公

論社・一九七九年。初出は一九三一年)。

(29) 頼原退蔵「俳諧文学」(『頼原退蔵著作集』第三卷・中央公論社・一九七九年。初出は一九三八年)。

(30) 水谷隆之・注(25)と同。

(31) 牧藍子「発句の「ぬけ」」(『国語と国文学』二〇〇九年八月)。

(32) 深沢眞二・深沢了子「宗因独吟「世の中の」百韻註釈」(文学史探究の会『近世文学研究』二号・二〇一〇年七月)。

(33) 加藤定彦・注(10)と同。

(34) 岸得蔵・佐藤彰・桑原敬治・安藤勝志「『太郎五百韻』注解—「あしからし」の巻—」(『静岡女子大学 国文学研究』四号・一九七一年三月)。

(35) 注(34)と同。

(36) 注(34)と同。

(37) 「一時軒会合／次郎五百韻」(序)で任口は「なそく」の俳諧に言及するが、「馬のりや畜生道におちぬらん(一)／吉田と申遊女ありけり(貞因)／大根やをし付へしつけ桶ふせに(梅翁)」という句も載る。

(38) 岸得蔵「西岸寺任口年譜」(仮名草子と西鶴)成文社・一九七四年)。(しのはら・すすむ／本学教授)